

2011年度 文化構想学部 現代人間論系 転部入試

【小論文】

問題：下の文章は、「タイガーマスク運動」について齋藤環氏が執筆したものである。これを読んで、「現代の人間」についてあなたの考えるところを、現代人間論系であなたが学びたいことがらと関連づけつつ、600字以上、1000字以内で述べなさい。

タイガーマスク運動：「キャラの善意」は偽善か（齋藤環）

2011年最初のブームは、どうやら「タイガーマスク運動」ということになりそうだ。きっかけは、昨年12月25日に前橋市に現れた「伊達直人」（「タイガーマスク」の主人公）だった。彼が児童相談所に寄付した10個のランドセルが発端となって、“運動”の輪は連鎖反応のように広がり、瞬く間に全国規模の現象となっていったのである。

心温まるニュースとして歓迎する声がある一方で、どこか偽善のにおいがして手放しで喜べないとする意見もある。しかし、こうした流行に対して「善意は正しく使うべきだ」といった正論をぶつけてみてもしかたがない。

たとえ、そこに自己満足や相手への配慮不足がみてとれたとしても、人には悪意と同じくらい、やみくもな善意への衝動がある。そう、偏った形でしか発揮され得ない善意というものがあるのだ。この種の善意を萎縮させるには「フェアに」「公平に」「適切に」と言い続けるだけで十分である。

とはいえ、この現象は精神科医として見ても、なかなか興味深いものだった。

日本では継続的な慈善活動が定着しにくいと言われるが、その原因のひとつとして、システムへの不信がある。寄付が有効活用されているか、きちんとチェックできず、メディアの関心も高くない。チャリティー精神の背景となる宗教的な基盤も弱い。

そのかわり、われわれは「祭り」としてのチャリティーには好んで参加する。ショーやコンサートはもちろん、期間を限定した募金活動やチャリティー番組もある。大規模災害の際の義援金にも、そうした側面が感じられる。そういえば「ホワイトバンド運動」といった“流行”もあった。

ネット上では、冗談半分でなんらかの活動が連鎖的に盛り上がることも「祭り」と言う。「タイガーマスク運動」の場合は、年末年始という「チャリティー祭り」にふさわしいタイミングと、マスコミ報道によるフレームアップも相まって、二重の意味で「祭り」化していったようにもみえる。

もうひとつ、今回の現象で特異だったのは、当初の「伊達直人」からキャラクターがどんどん拡散し、多様化していったことだ。そのリストには星飛雄馬やアンパンマン、ディズニーやジブリ作品の登場人物、キャラの立った戦場カメラマンなどの名前が連なる。

これは果たして「匿名の善意」なのだろうか。むしろ「キャラの善意」と考えるべきで

はないだろうか。だとすれば、「祭り」を連鎖させていった最大の要因は、あたかも「コスプレ」のように「慈善キャラ」になりきりたい、という欲望ではなかったか。

個人名でのランドセル寄付は、どこか気恥ずかしい。もし報道されたりしたら、世間にはやっかみ半分でたたく人も出てくるだろう。だから実名は出したくない。さりとて匿名では寄付の事実が埋もれてしまう。どうせなら自分の善意になんらかの形を与え、痕跡を残したい。

そのように考えた時、「伊達直人」というキャラになりきることは、実名と匿名のちょうど中間の選択として、まことに格好のアイデアだったのだ。キャラは必ずしも「匿名」ではない。少なくともメディアやうわさの中では「あれは自分だ」という同一性が保たれる。

つい最近まで「キャラが立った総理」の下にあったこの国の民は、子どもから大人まで「キャラになる」行為になじんでいる。それは社会的な仮面としての意味を持つばかりではない。人とつながったり、普段とは違う行動をしたり、自分を否定したくなったりしたとき、私たちは少しだけ「キャラ」になる。その行為の延長線上に「伊達直人」はいる。

それでは「キャラの善意」はやはり「偽善」なのだろうか。

「左手に告げるなかれ」と聖書にはある（マタイ福音書）。施しという行為にともなう自己満足への戒めの言葉だ。ならば、「キャラの善意」はどうか。おそらく、それは直接には自己満足につながらない。個人と公共を媒介する存在としてのキャラは、集合的な存在でもあるからだ。

そこに満足があり得るとしても、それは単なる個人的感情を超えている。善人ではなくキャラを装うことで、善意の純度はむしろ高められるのだ。そこに偽善のニュアンスは限りなく薄い。

もともと、祭りという性質上、これが恒常的な慈善行為に結びついていく可能性は少ない。おそらくこの現象は、一過性で終息するだろう。ここで「継続が大切」とか、余計なおせっかいを言うつもりはない。ただ、これだけは言える。小さな善意の表現形式として、この「キャラ祭り」は、日本人ならではのナイスな「発明」だった。そのことの価値は誇っていい。

だから祭りは祭りとして、迷惑をかけない程度に楽しめばいいし、楽しんだら忘れてしまってもいい。でも、また年の瀬がめぐってきたら「伊達直人」には帰ってきてほしいものだ。終わらない祭りはないけれど、祭りは毎年くり返されるのだから。

（毎日新聞 2011年1月23日 東京朝刊）

